

# 気象ジャーナリズムに

ついて —地方人の手紙—

堀内 剛二

いつものことながら、文献をありがたう。自然科学というものを道楽にやれないのはどうもこの文献のせいらしい、と、そんなことをふと考える程地方はその点不便である。ところで、今度は文献の外に雑誌が2、3同封されていて、感想を書けとのこと、お礼をいうべきかどうか思案したが、案ずるより書く方が早いので、書くことにした。何ごとも昨今は時代感覚というものがあるようで、夜半栗の実の落ちる音に目をさまされる当地にいて、こればかりはどうしようもない。だが、季節だけは判然している積り。そう思って読んで貰えれば結構である。

気象関係の雑誌は、純学術的なものを除いて、なお数種類が刊行されている。それぞれがそれぞれの機関によってそれぞれの主旨で編輯されなかに一般市場に出ているものもある。それぞれ若干の歴史的背景を持ち、それぞれ編輯にも若干の特色を持ち、既にしてそれぞれは定期刊行物として一応社会的生産物となっている。だから、従来統合の意見もなくはないが、簡単に機械的な統合をすることの困難は、もしこんな比喩が許されれば、政党の場合と似ているとでもいえようか。筆者はそんな大問題を取り上げようとは毛頭考えない。たゞ君の送ってくれた雑誌を虚心に眺めながら、戦前と戦後で気象関係雑誌の変遷を漠然と思ひ浮べて、主観的ではあるが、いって見れば「気象ジャーナリズム」と名づけてもいゝ現象が起つてあることを認めたのである。これは多分戦後デモクラシーの発達と関係があるだろう。従来のいわば閉じた状態から

開かれた状態へと漸次移りつゝある気配が見える。自由競走と客観的批判とが多少のコンマーシャリズムを媒介として現わされようとしているらしい。そして、もしこの傾向が事実ありとするなら、「気象ジャーナリズム」はやがて細々ながらも確立されてゆくことになるだろう。

広辞苑でジャーナリズムの項を引くと、「新聞、雑誌、ラジオなどの事業(界)。またその勢力」とある。

気象関係雑誌はそれぞれの機関がその会員に頒布するものが多く、必ずしも一般商業誌と同一には扱えないものゝ、こゝでもやはりジャーナリズムは読者の有形無形の批判を通じて言論を健全化するに役立つだろう。やがては他面害も伴うことになるかも知れぬが、利害の相伴うは常にまぬがれ難い。

「気象ジャーナリズム」は、それでは、奈辺に認められるか。従来の気象関係雑誌記事は主として紹介又は解説が主で、気象知識の普及においても戦前は遅々とした状況にあった。つまり、気象事業そのものがかなりアカデミックな色彩を帯び、社会は気象人を学者として特殊対遇した観があった。多少のなごりは現在もなくはないが、事情はもはや質的に異って来ているようである。ラジオのみを考へても、全国での気象技術者の放送回数とその分布は既にして一変し、最近はまだテレビジョンがこれに加わっている。これらの内容を項目別に統計して見ると興味ある結果がえらるであろう。

最も注目すべきは、なかならず、気象知識の普及の面ではあるまいか。戦後教育組織の改変によって、特に初等教育法が一変した。自然科

学教育の一環としての自然観察に、気象観測がきわめて適当であるとの理由で、初等教科書にもかなりそれが取入れられたことは注意されねばならない。これを如実に示すものは初等気象知識の普及を目的とする単行書の刊行であって、その数は近時飛躍的に増大している。また、天気相談所の利用者数とその内容を調べるならば、これを裏づける資料をうるのであろう。ところで、残念ながら、教育に関する限り気象知識は一般自然観察の一方法であり、それによって自然科学教育を、また更には広く人文科学教育をもめざすものである点、まだ充分明確にされていない憾がある。いわば、この種の単行書はまだ多分に自然発生的であり気象教育についてその方法の検討と確立は、今後に残されているように思われる。こゝでは気象学者と教育学者及び一般教育者との協力が必要となる。

気象ジャーナリズムの発生が開かれた状態への推移によるとすれば、上記の諸事実がそれを促進し、従来の特長的、やゝ独善的傾向を是正する方向に向うだろう。筆者の見るところ、現にそれを暗示する諸事実が二・三見られる。例えば、ある刊行物は巻頭言を掲げて気象界における諸問題を論じ、ある刊行物は匿名欄を持ちかなり自由な短評を連載し、あるものは読者との交流を目的とした質疑討論の場をつくらせている。これらはいずれも従来は見られなかったものであって、ともかくも一の動向を示すものであろう。また気象部外よりの投稿として学校気象班や生徒の手になるものが僅少なながら散見されるのも興味深いものがある。

最も端的にこの間の推移を示すものを挙げるとなれば、最近ある気象関係商業誌に掲載された探偵小説にしくものはないであろう。正直に言って、筆者はその目次を一見していきさかおどろいたものであった。だが、それが現われるにはやはり相当

の理由がある様に思われる。その探偵小説の筆者はまえがきに、読者が興味を持って読み、知らず知らずのうちに気象に関心を持たせるような記事の必要を感じている旨を述べているが、いうまでもなく、それが彼に一見奇矯な探偵小説執筆の決意をさせたものに相違ない。出来ばえについては、残念ながら上々とはいいかねる。しかし、こゝにそれを取上げたのはその手ぎわを是非するためではない。

筆者思うに、現在気象関係諸誌の編輯者諸氏で、誌面が充分おもしろく読まれていると自信を持っていえる人は、失礼ながら、案外少ないのではあるまいか。もちろん、気象技術の研修を旨とする雑誌はおもしろくする必要がない、との論旨も成り

立つだろう。しかしこの場合、その紹介解説は適切且つ理解しやすいことを要し、それが面白いということと同義語となる。また、もし啓蒙的な気象記事の場合なら、読者に興味を持たせることは実に内容と不可分の関係を持つこととなるであろう。おもしろく読ませることは、読者にこびることでなく、方法と表現に関する重要な問題である。

今夏東朝学芸欄に「夏のペン」と題する記事が連載され、矢野健太郎氏の数学パズルが意外の反響を呼んで、数学教育に関する一話題を提供したことがある。王道のないことは気象学も数学も変りはない。しかし一応読者を持つ気象雑誌がおもしろくなくてもいいという理由はない。その意味において問題は提起された

といえるので、これも恰好な気象ジャーナリズムの問題である。

ついでにちよつとつけ加えると、矢野氏によれば、数学パズルの解答はエレガントでなくてははいけないとのことである。ところで筆者のこの手紙はおよそエレガントなるものとは縁遠い。これも適度の「気象ジャーナリズム」が発達すれば、幾分かはよくなるものと実は大いに当にしている次第である。

気がついて見ると、秋雨がかすかな音を立て、降っている。それにしばらく耳を傾ける。――

ではこれで擱筆しよう。いずれまた。

—1955・9・20—

## 天気投稿規定

「天気」は日本気象学会の機関誌で、年12回発行され気象に関係のある、(1)論文、(2)要報、(3)討論、(4)総合報告、(5)解説、(6)写真、(7)学会記事、(8)会員消息、(9)意見その他を自由に投稿できますから、ふるって御投稿下さい。

御投稿の時は、次の点に御注意下さい。

1. 送り先は、東京都千代田区大手町1の7日本気象学会、天気編集委員、奥田穰 宛、のこと。天気編集委員が受理した日をもって、論文受理日とします。
2. 原稿は、400字詰めまたは500字詰め原稿用紙に和文で横書きにし、長さは400字詰め原稿用紙で、30枚を越えないようにして下さい。これを越えると、適当な代価を請求することがあります。欧文のアブストラクトをつけても結構です。
3. 論文の始めには、題名、著者名、所属機関名を明記して下さい。
4. 図表の数はできる限り少なくし、図は黒で縮尺を考慮してせん明にトレースして下さい。
5. 数式は行をあけて明瞭に書いて下さい。
6. 引用文献は論文末につけ、次の例にしたがって書いて下さい。

藤原咲平：1950、気象光学進歩の概観、気象集誌Ⅰ，28，55～68。

「天気」の編集は天気編集委員会で行い、事情によっては、論文の加筆、削除等を著者に請求することがあり内容によっては、印刷しないこともあります。また印刷の順序は、受理日順としますが、編集の都合によって、必ずしもその通りに行かないことがありますから、御了承下さい。

会員は論文、要報、総合報告の別刷を50部まで無料で請求することができます。それ以上の部数が御入用の時は、実費で御渡します。学会記事、会員消息、写真、その他に対しては別刷を出しませんが、場合によっては実費でおわちします。非会員の方が投稿された場合には、印刷代および別刷の実費をいただきます。

「天気」編集委員はつぎの通りです。

編集理事	有 住 直 介
編集主任	蔵 重 一 彦
編集幹事	奥 田 穰
	荒 井 隆 夫
	小 埜 磐 雄
	小 林 寿 太 郎
	長 尾 隆
	吉 野 正 敏